多世代の集う共用空間における利用実態
ーはっぴーの家ろっけんを事例としてー

The Study on Activities in The Common Space Used by Many Generations
- A Case Study of Happy No Ie Rokken -

○清水紗英[*1]，山崎寿一[*2]，山口秀文[*3]
SHIMIZU Sae, YAMAZAKI juichi, YAMAGUCHI hidefumi

The aim of this paper is to find characteristics and activities in the common space used by many generations, and to discuss about the effects observed there. I investigated elderly residential facility in Kobe city that has living space that local residents spend time freely. The result in this study cleared that the living space is comfortable because of moderate sense of distance which is created by spending each time and mutual supports among residents, staffs and local residents.

キーワード：高齢者福祉，居住施設，生活実態，共用空間
Keywords: Elderly Welfare, Residential Facility, Actual Life Condition, Common Space

１．はじめに

1-1　研究背景

日本は現在高齢化率 28.4%（2019 年）となっており、超高齢化社会の中で今後も増え続ける高齢者の医療や介護の需要に対応していくため、高齢者福祉は施設や自宅でのケアから地域の中でのケアにシフトしてきている。それに伴い、高齢者の居住に対するニーズも変化し、地域包括ケアシステムの中での高齢者向け住まいの在り方も変化している。中でも、サービス付き高齢者向け住宅（以下、サ高住）をはじめ、「グループリビング」[注1)] などが注目を浴びている。近年には、高齢者向け住まい・施設だけでなく、保育施設やフィットネス等が含まれる複合型施設もあり、多世代の交流が可能な施設も増えてきている。

本研究で今回対象とした事例は、2017 年に開設されたサ高住であり、地域に開放された共用空間での多目的かつ多世代での利用に特徴があるため、近年の多世代交流を行う共用空間の特徴的事例として位置づけられ、高齢者居住福祉の今後の展開を考える上で意義があると考える。

1-2　研究目的と方法

このような背景から、本研究では神戸市長田区のサ高住はっぴーの家ろっけん（以下ろっけん）（ろっけんでは高齢者向け介護付きシェアハウスと表現されていた。）の事例を対象に、多世代で利用される共用空間の利用の実態を把握し、整理することを目的とする。本研究で扱う事例はサ高住でありながら、地域に開放された共用空間を持ち、開設の経緯及び運営者の方針、また地域住民の利用の背景となるような地域の特徴等が共用空間の利用に影響していると考えられる。さらに、利用実態について把握し、整理することで多世代利用の共用空間の効果について考察することができると考える。そのため①運営理念・周辺環境の把握②利用者別（地域住民、居住者）での高齢者居住施設の共用空間の利用実態と空間の使われ方の把握の 2 点を具体的に明らかにした上で、調査からわかった多世代で利用する共用空間の効果についてま

*1　神戸大学大学院工学研究科博士課程前期課程、大学院生　Graduate Student, Graduate School of Eng., Kobe University
*2　神戸大学大学院工学研究科、教授、博士（工学）　Professor, Graduate School of Eng., Kobe University, Dr. Eng.
*3　神戸大学大学院工学研究科、助教、博士（工学）　Assistant Professor, Graduate School of Eng., Kobe University, Dr. Eng.

とめる。

これらの課題を明らかにするために、既往研究、対象地区の文献の収集、ろっけんの Facebook（以下 FB）や Youtube などの配信情報[注 2)注 3)]やマスコミの報道を整理した上で、ろっけんのスタッフの方にヒアリング調査を行った。ろっけんには、2020 年 2 月 25 日の調査と公式 Facebook、Youtube を踏まえ、2020 年 6 月 22 日に再度ヒアリング調査を行った。（**表 1**）参考とした FB は、ろっけんの様子を配信するために主に日常の一部及びイベントの様子の動画及び写真、文章を投稿したものであり、Youtube では、日常やイベントの様子の他、メディアで放送された内容について投稿している。本研究では、これらを参考にスタッフにヒアリングすることで、日常的な場面とイベントなどの特徴的場面を含めた共用空間の利用について把握する。

表 1　調査概要

調査対象	調査内容	調査年月等
ろっけん 代表秘書兼介護 スタッフ	ろっけんの内容、 地域との関わり	ヒアリング 2020/02/25 (1.5h)
ろっけん 代表秘書兼介護 スタッフ	業務の内容、入居 者との交流、地域 利用者との交流	ヒアリング 2020/06/22 (1h)

1-3　既往研究と本研究の位置づけ

多世代間交流と高齢者福祉の関わりについて、「ごちゃまぜ」という考え方が 2019 年の住宅系研究報告会におけるパネルディスカッションでもテーマになっており、NPO 法人地域の寄り合い所 また明日（代表理事：森田眞希）の施設でも多世代での利用が行われることで助け合って生活しているという報告がされている。[注 4)]

更に、地方都市における高齢者の安定的な居住を図るための実践的な方法や計画についての研究は、園田らの研究 [1)]があり、ワークショップを通し、グループリビングと周辺の地域活動との連携や行政との連携の重要性が述べられている。グループリビングの暮らしの変遷と持続的運営に関する研究については、土井原らの研究 [2)]がある。これらの研究では施設屋外環境や周辺地域に広げた行動や生活構成、現代の社会での高齢者向け住まいの実態や地域との関わりについては明らかとなっていない。また、地域包括ケアシステムの導入や高齢者の増加による福祉の現状の変化などで、高齢者向け住まいの在り方や高齢者居住へのニーズが大きく変化しており、高齢者向け住まいの位置づけも変わってきている。

本研究では、近年の高齢者向け住まいとして地域に開かれた空間を持つサ高住の事例をとりあげ、運営理念と多世代の多様な共用空間の利用実態を明らかにし、多世代利用の共用空間での効果についてまとめることに独自性があると考える。

２．研究の対象

2-1　対象事例周辺の地域の概要

神戸市長田区の高齢者福祉としては、地域見守り活動推進事業として、あんしんすこやかセンターに配置された見守り推進員を中心に地域の高齢者の安否確認などの見守りを行っている。更に、ひとり暮らし高齢者や 75 歳以上の高齢者だけの世帯を対象に、近所の方が週 1 回程度、 安否確認や話し相手、相談などを行う友愛訪問活動も盛んで、長田区には約 300 のボランティアグループが活動している。その他、地域福祉センターなどでの「ひとり暮らし高齢者ふれあい給食会」や高齢者の安否確認や話し相手となるテレフォンサポートなどの活動を行っている。

ろっけんのある神戸市長田区の真陽地区は人口約 6,650 人、高齢化率 33.3%（神戸市 26.8%）の地区で住、商、工の入り混じる下町風情の残る町並である。真陽地区は、1984 年（昭和 59 年）に若手人口の減少への対応策を目的として社会福祉推進協議会が設置され、本格的なまちづくりが始まったが、協議会設立以前から防災福祉コミュニティや商工会などが中心となって活動している地区である。阪神・淡路大震災での建物火災被害が大きかったものの地区内での避難ができ、日頃から高齢者の方々をまち全体で把握してきていたこともあり、震災後の安否確認も行えていた。震災後の平成 8 年（1996 年）からは防災福祉コミュニティモデル地区として地区内の全組織団体で構成された真陽防災福祉コミュニティがあり、防災意識を高めるとともに、真陽共立（ともだち）ネットワークなど、若者のまちづくり参加を促す仕組みが作られている。

2-2　対象事例の概要

2-2-1　建物概要

本研究では、高齢者向け住まいの近年のモデルの 1 つの事例として、株式会社 Happy が運営する地域に開放された共用空間を持つサ高住はっぴーの家ろっけんを対象に調査を行った。1 階部分が地域に開放されたリビング兼スタッフルームとなっており、2～6 階部分に 44 戸の居室と各階に居住者が利用できる共用空間が設けられて

いる。

今回主に調査した１階の共用空間は地域に開放されており、居住者の食事スペースやテレビなどの団欒のスペースの他、スタッフの事務スペース、キッチンも含まれており、常に誰かがいる状態になっている。

また、居住者の浴室や多目的トイレは１階の共用空間からの出入りのみとなっているため、介助の面においても居住者やスタッフは共用空間に集まりやすいつくりとなっている。更に、地域の人に開放されており、近所の小学生が遊んでいたり、子連れの人がワーキングスペースとして利用していたりと、日常の生活の一部として様々な人が同じ空間にいながら多目的に利用している。（図 1）

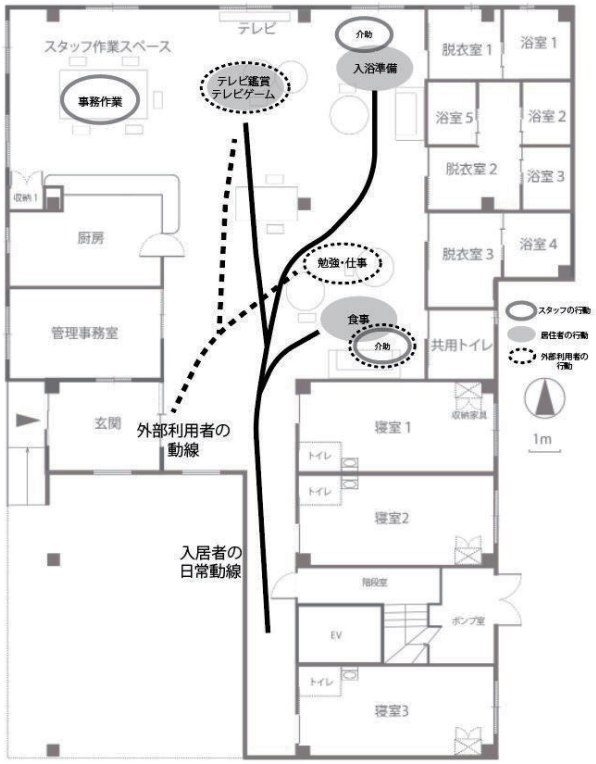


図１　ろっけん１階共用空間平面図

居室は、一つ一つ異なる間取りやデザインをしており、介護のしやすさや居住者の好みも併せて居住者に合ったものが選べるようにしている。各階の共用空間には、給湯設備と机やソファーなどが設置されており、基本的に地域には開放されておらず、居住者同士の交流の場となったり、スタッフのミーティングや研修に利用されたりしている。

2-2-2　運営の概要

(1) 立ち上げの経緯・経営理念

ろっけんを立ち上げた代表者 S さん（以下、S さんの話の内容をまとめたもの）は、住商工が入り混じり長屋が多く人と人のつながりが強い長田区で生まれ育ち、大家族であったこともあり、家には多くの人が出入りしていたが、阪神淡路大震災で、そのようなつながりがなくなってしまったと話している。S さんは当時のにぎやかでお互いに助け合えるという大家族の暮らしやすさを認識していたため、新長田に残る古い町並みや人のつながりを活かしたいと、家だけでなく仕事や人の暮らしも提案する不動産として空き家再生事業を始めた。事業で知り合った高齢者から介護の現状として費用や施設の不便さを聞き、「施設は介護施設をつくるためではなく、地域に根差した生活空間としての施設を作ろう」と思ったことがきっかけとなった。そして、街にどのようなものが必要なのかを知るために、ワークショップを開き、地域住民の欲しい場所を集計し、そこから地域のニーズに合わせたはっぴーの家ろっけんができあがった。

地域参加型のワークショップを基に設立され、約 100 人もの地域の人が設立前から関わっており、ワークショップをきっかけに利用している地域の利用者も多い。利用者や来訪者は多い時には、週に 200 人程度も訪れており、1 階の共用空間の居住者以外の利用も活発であると言える。[注 5)]

理念としては、「ハッピーな暮らしを問い続けること」、そして「当たり前をリノベーションすること」であり、昔の大家族の暮らしの良さを再確認し、現在の暮らし方への問いを投げかけることで、今の当たり前となっている生活の在り方を変えていくことである。[注 6)]

(2) 運営実態

現在は 60～90 歳の 27 人が入居しており、認知症や介

表 2　イベント

イベント	内容	参加者
すみびらき (月に 1 度程度)	見学を含むワークショップ	入居希望者、見学者、地域住民、入居者
クイズハピオネア (3 か月に 1 度)	講演会とクイズやまち歩きなどの参加型イベント。	見学者、入居者、地域住民など
将棋・卓球会など(不定期)	居住者と地域の住民で開催。	居住者、地域住民など
行事（季節ごと）	お花見や節分、年末の会など	居住者(地域住民)

（2020 年 6 月 22 日ヒアリングより筆者作成）

護度の高い居住者も生活している。介護については、ものづくり工房の２階にある事務所から訪問介護、訪問看護の提供を行っており、介護スタッフ 10 名、看護スタッフ２名、作業療法士１名が、居住者のケアプランに合ったケアを24時間体制で行っている。18.01㎡ ～ 21.24㎡の居住部分には便所、洗面、収納の設備がある。

(3)イベント運営

施設内のイベントを、ヒアリングをもとに**表 2** にまとめた。月に１度は、地域や地域外の来訪者がろっけんの理解を深めることのできるイベントを開催し、実際に見てろっけんの利用について知ることができる。また、不定期で卓球大会（**図 2**）や将棋の会などのイベントも開催しており、施設の広報と同時に地域の人が共用空間を利用するきっかけになっている。

図 2　卓球大会[注7)]

2-2-3　周辺とのかかわり

ろっけんでは、近隣の公園に散歩に行くだけでなく、徒歩圏内に畑もあり、日頃の散歩で畑に行ったり、地域の住民と収穫をするイベントを開催したりしている。更に、ろっけんの介護サービスを行っている事務所（本町ものづくり工房。1 階はレンタルスペース、2 階事務所で訪問介護・看護・ケアマネステーション、移住相談窓口などの複合型相談窓口を行っている。）が近くにあることで、ろっけん外の施設との連携が可能となっている。また、近隣の喫茶店と提携し、居住者や利用者の食事を提供してもらうことがあったり、商店街のイベントに参加したり、銭湯では地域の方との会話をしたりと地域との関係ができている。これらの位置関係を**図 3** に示した。

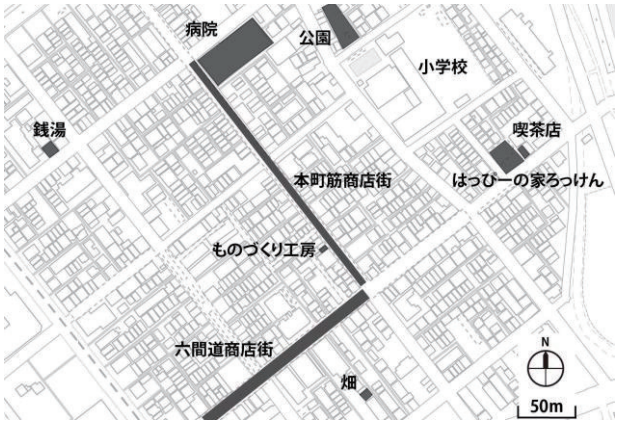


図 3　ろっけんと地域の関わり

(2020 年 6 月 22 日ヒアリングより作成)

2-3 事例の特異性

本研究の事例は建物内に居住者などの関係者以外の地域の住民も利用可能な空間を設けており、その空間で居住者とスタッフ、地域住民が多世代で利用し、関わりあっている点において、従来のサ高住と比べて特異であることが言える。その要因として以下の 3 つが考えられる。①開設の経緯が高齢者向け住まいを作ることではなく、地域に根差した生活空間であり、②戦前から周辺地域のコミュニティネットワークができており、政策的にも若者もまちづくりに参加しやすい地域であるため、地域住民の利用が促進されている。また、③平面計画的にも、各居住部分の設備が最低限で居住者が日常的に共用空間を通る動線であり、日常生活の行動の前後で共用部分に滞在しやすいと考えられる。

３．共用空間の特徴

ここでは公式FBやYoutubeに記載されている内容をヒアリングで確認したことから、利用者別に共用空間の利用実態について把握・考察する。公式 FB は 2017 年 2 月 1 日からあり、月に 20 件以上、主に日常の様子やイベントの様子についての投稿やイベントの告知などを行っており、公式 Youtube チャンネルは昨年から主にイベントの様子や、メディアで放送された内容などを 8 つ投稿している。本研究は、インターネット発信された情報から日常生活の中でも特徴的な場面を取り上げ、さらにヒアリングで特徴的場面の情報の追加、日常的な場面の把握をしてまとめた。（**表 3－1、表 3－2**）

3-1　利用者の利用実態

①居住者

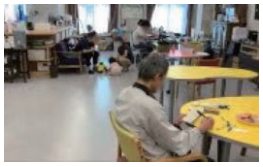
居住者は共用空間では、主に食事をする以外に、他の居住者やスタッフ、地域の人との会話をしたり、テレビを見たりするなど、自由に過ごしているようだとスタッフは言う。また、スタッフは、高齢者が共用空間にいる子供の見守りや、子育ての相談、チラシを挟むなどの依頼された簡単な手伝いを任されることもあ

表 3－1　共用空間の利用内容（居住者）

共用空間利用者（利用時間）	番号	FB・Youtube 上の写真	FB・Youtube からの共用空間の利用実態	介護スタッフのヒアリングからの共用空間の利用実態	介護スタッフの主観的評価
居住者 24 時間開放（基本的には 7:15～18:00 ごろまでの人が多い）	①		食事や、他の居住者やスタッフ、地域の人との会話をしたりしている。（公式 FB2020 年 2 月 6 日投稿より 2020 年 6 月 18 日閲覧）	主に食事で利用し、居住者は介護士の作った一人一人のケアプランと自分の体調や気分に合わせて共用空間を利用したり、居室で過ごしたりしている。	居住者の人には自由に過ごしてもらっている。
	②		高齢者が共用空間にいる子供の見守りや、子育ての相談、チラシを挟むなどの依頼された簡単な手伝いを任されることもある。（公式 Youtube チャンネル 2020 年 5 月 16 日投稿 4:00 より 2020 年 6 月 18 日閲覧）		いろいろな人と関わることで刺激を受けて生活できる。
	③		手が器用なことから、新聞紙でゴミ箱を作ったり（図 4）、地域の子どもの持ち物の名前書きを頼まれることもある。（公式 FB2020 年 1 月 19 日投稿より 2020 年 6 月 18 日閲覧）	居住者の H さん（90 代・認知症）は、見守りの必要もあるため、1 日の大半を共用部で過ごしており、新聞紙のごみ箱を作ったりしている。	高齢者が支えられるだけでなく、日常的に自分ができることを自分で行うことで、身体能力の維持にもつながっている。
	④			深夜に眠れなくて共用空間にくる人もいる。 →自由にできる。ほかの施設であれば徘徊しないように睡眠薬を投与したり、部屋を施錠したりするが、施設では行動が制限されていない。睡眠薬もどうしても眠れないという希望者のみに渡している。	
	⑤			徘徊する方もいるが自由にしてもらっている。前はついていったりしていたが今は一人で行き、お守りとして GPS を持ってもらったりすることもある。（施設に一つ） 近所の地元の人が顔を覚えてくれていて、探しているときに教えてくれたり、施設に遊びに来たりする小学校の子がけがをした入居者の方を連れ帰ってきてくれたりもした。	けがをして帰る人もいるが、元気に外に出る人のほうがけがの直りが早かったりする。
	⑥		すみびらきというイベントで居住者が太鼓に触れたりしている。	月に 1 回程度のイベントで、地域の人や遠いところからの人が多く集まる。	
	⑦		居住者と子供と身近なもので実験している。（公式 Youtube チャンネル 2020 年 5 月 16 日投稿より 2020 年 6 月 18 日閲覧）	イベントや介護などのスタッフが考えた企画はリビングにいる居住者を巻き込んで参加してもらったりもする。（オンラインでは突然パソコンを渡して話してもらったりなどもある。）	ケアプランや体調に合わせイベントに参加するかしないかは自由。（個室でテレビを見る人もいれば、1 階で見ている人もいる。）

（FB、Youtube 代表秘書兼介護スタッフ T さんへの 2020 年 6 月 22 日ヒアリング調査より筆者作成）

表 3－2　共用空間の利用内容（利用者・スタッフ）

共用空間利用者（利用時間）		番号	FB・Youtube 上の写真	FB・Youtube からの共用空間の利用実態	介護スタッフのヒアリングからの共用空間の利用実態	介護スタッフの主観的評価
地域内外の利用者	地域内 24 時間開放（小学生は 9:00～17:00 まで）	⑧		大人が集まって食事をしている。(公式 FB2020 年 2 月 22 日投稿より 2020 年 6 月 18 日閲覧)	24 時間開放はしているので、夜遅くにシェアキッチンのように厨房を利用してご飯して帰ったり、代表やスタッフと話しこんでいたりする。・誕生会など、気軽に集まれる場所があっていいと言われることはある。	
		⑨		子育てをしながら事務作業をしていたり、共用空間には多くの目があり、手伝ってもらえる。(公式 Youtube チャンネル 2020 年 1 月 24 日投稿 2:52 より 2020 年 6 月 18 日閲覧)	30～50 代の方が多い →平日の夕方にふらっと来る人が多く、お昼から来る方もいる。 子育て世代も多い。子育ての相談など。 代表つながりやイベントで知ってくれた人が利用することが多い。	
		⑩		利用する子供は走り回ったり、卓球をしたり、テレビゲームをしたりしている。(公式 FB2017 年 3 月 19 日投稿より 2020 年 6 月 18 日閲覧)	30 代から 50 代に次いで小中学生が多く、日常的に放課後に暇な時に気軽に遊んだり、勉強をしたりしている。 施設内にあるゲームをしたくて 9 時前から外で待っていたり、9 時前にこっそり施設に入ってゲームだけ取ってしていることもある。	
		⑪		スタッフの手伝いをしたり、幼児の面倒を見たり、高齢者の食事の介助を手伝ったりするなどしている。（公式 Youtube チャンネル 2020 年 1 月 24 日投稿 1:49 より 2020 年 6 月 18 日閲覧）	常連の利用者と居住者が仲良くなったりする。(子どもたちや様々な人と居住者の人が触れ合える環境)	
		⑫			高校生・大学生は記事を見て興味を持ってくれた人や、親が利用していてついてくるという人が利用している	
	地域外 基本的には受け入れ	⑬			遠方から来る方も多い。来たことのある人などはふらっと利用したりする。 問い合わせも多く、すみびらきなどのイベントに参加してもらうようにしている。	
スタッフ 日勤：9:00～18:00 夜勤：17:00～9:00		⑭		共用空間には、仕切りのない場所にスタッフの事務作業のできるスペースがある。（写真奥・公式 FB2020 年 6 月 4 日投稿より 2020 年 6 月 18 日閲覧）	高齢者の見守りや共用空間の利用が一目でわかるようになっているため、高齢者への声掛けや、居住者の行動に対応した介護が行いやすい。(写真右奥の机が主にスタッフが利用しているが専用ではないので誰でも使える。)	仕事という感じはしない。他の仕事をしていたけれど、家と会社の往復だった。会社終わりはっぴーの家ろっけんに行くようになって、人と触れ合い、全く生活の質が変わった。ワンクッション挟むだけで元気になれた。
		⑮			スタッフが子連れで勤務でき、子どもは共用空間で地域の利用者と同様に過ごすことができ、働きながら子育てしやすい環境ができている	子どもたちがいることで場が和み、ケアがうまく進むこともある。
		⑯		実家もなくなって今はこの施設が実家のようだと話す青年や家のようだと言う外語区人留学生もいる。（公式 Youtube チャンネル 2019 年 9 月 18 日投稿より 2020 年 6 月 18 日閲覧）	元利用者がアルバイトや、スタッフとして滞在することもある。M さんは現在 SNS を担当してもらっている。	

(FB、Youtube と代表秘書兼介護スタッフ T さんへの 2020 年 6 月 22 日ヒアリング調査より筆者作成)

り、高齢者が支えられるだけでなく、日常的に自分ができることを自分で行うことで、身体能力の維持にもつながっていると考えている。

基本的には、午前 7 時から午後 6 時前後まで居住者が共用空間で過ごすことが多いが、ろっけん内の行動の制限を設けていないため、夜に寝付けない居住者が共用空間で過ごすことが多いが、ろっけん内の行動の制限を設けていないため、夜に寝付けない居住者が共用空間を利用する場合もある。その場合には、共用空間にいるスタッフが見守りを行っている。(**表 3－1④**)

外出は基本的にスタッフがついていたが、一人で地域内を徘徊して迷子になった居住者を利用者が見かけ、ろっけんに情報共有して無事に見つかったこともある。散歩中にけがをした居住者を、ろっけんを利用している小学生が発見し、ろっけんまで連れて帰ってもらったこともある。利用者が顔見知りになることで、地域内でも居住者の見守りとなっていることもあり、現在は GPS をお守り代わりに所持してもらって居住者一人で行うこともある。(**表 3－1⑤**) ろっけんの代表やスタッフの子どもがいるため、教育関係のイベントも開催されており、子どもとともに高齢者が参加することもある。(**表 3－1⑦**)

②地域の利用者

地域に開放された共用空間の利用者は、近隣に住む小学生や子連れの女性、地域の学生だけでなく、地区外からの来訪者など、多世代の利用者が多様な利用をしている。

利用層は 30～50 代が一番多く、夕方ごろ近隣住民がフラッと利用したり、遠くからの利用者もいる。スタッフによると、代表と知り合ったことがきっかけでの利用者が多いということだった。次いで近所の小中学生が多く、放課後や休日の遊び場や学習の場として利用している。高校生や大学生は少なく、興味を持っている学生や親が利用している学生が主に利用している。共用空間は基本的には常に開放されており、シェアキッチンで複数の家庭が一緒に夕食を作って食べたり、夜まで知り合いで集まったりという利用がされている。(**表 3－2⑧**) 子育て世代の地域の人は、子育てをしながら事務作業をしていたり、子育てなどの相談をしに来たりする人もいる。共用空間には多くの目があり、子どもから目を離していても誰かが見ているという状況があり手伝ってもらうこともある。(**表 3－2⑨**)

利用する子供は走り回ったり卓球をしたり、テレビゲームをしたりしており、日常的に放課後の暇な時に遊びに来ていることが多く、自由に過ごしているようだとスタッフが話していた。その中で、スタッフから洗濯物をたたむなどの手伝いをしたり、子連れの幼児の面倒を見る経験をしたり、高齢者の食事の介助を手伝ったりする等し、高齢者や地域の人との関係を築くきっかけとなっている。(**表 3－2⑪**)

3-2　スタッフ・運営側の利用実態

共用空間には、仕切りのない場所にスタッフの事務作業のできるスペースがあり、高齢者の見守りや共用空間の利用が一目でわかるようになっているため、高齢者への声掛けや、居住者の行動に対応した介護が行いやすい。生活の中での介助となる入浴や食事、排せつなどの設備も共用空間、もしくはその付近で行うことができ、効率的に介護することができる。

また、スタッフが子連れで勤務でき、子どもは共用空間で地域の利用者と同様に過ごすことができ、働きながら子育てしやすい環境ができている。(**表 3－2⑮**)

元利用者が運営・介護スタッフとして働く場合もあり、共用空間の利用は運営にも影響している。

４．共用空間の利用による効果

このように高齢者向け住まいの共用空間が地域に開放されていることにより、共用空間でそれぞれの利用を通して、居住者と地域の人との関わりが生まれている。その関係性によって高齢者のケアや子育て世代など、様々な人がお互いに支え合い住みやすい空間を生み出している。

この関係性が建物内だけでなく、地域での利用者の目があることで、今まで外出を制限されていた居住者も外出できるようになり、建物内外での行動の自由が増加していると考える。実際の事例 (**表 3－1⑤**) からも、事例のような共用空間があることで、利用者によって地域で高齢者が認知され、地域での見守りにつながっていると言える。また、居住者が子どもを見守ったり遊んだり、軽度の仕事を任されることにより身体能力の維持につながったり、生活の楽しみになっていたりと、高齢者が様々な人とかかわることで刺激を受けながら生活することができると考えているとスタッフは言う。

居住者のみでなく、利用者も目的を定められていない空間を多目的に利用することで、心地の良い距離感で他者と関わることができる空間として利用することが可能になっている。子どもにとっては介護や幼児の子育てを

手伝うことで経験の場にもなっている。子育て世代の利用も多く、安心して子どもを遊ばせることのできる場所があることで、子育てがしやすい環境だといえる。

さらに、共用空間に地域の目が入ることで高齢者の見守りとなったり、利用者から居住者の生活の手伝いがあることで居住者の交流関係がスタッフのみでなく広くなったりしている。介護ケアに関しても、スタッフ以外の存在、特に子どもがいることで場が和やかになり、ケアしやすい環境ができている。(**表 3－2⑮**)

５．　まとめ

本研究の対象事例は、サ高住であるが、運営理念が「地域に根差した生活空間」であり、地域住民を巻き込んだワークショップから開設されていること、そして事例周辺地域の特性が影響し、地域に開放された共用空間で多世代の利用されていることが言える。

そしてその共用空間では、高齢者が食事をしている中で子供が遊んでいたり地域の利用者が仕事をしていたりと、それぞれの利用者で多様な利用の仕方がされていることが分かった。共用空間の利用目的が定まっていないことによってそれぞれの行動の自由につながり、過干渉しないが同一空間で過ごすという程よい距離感が生まれ、居心地の良い空間が創出されていると考えられる。また、共用空間で地域の住民と居住者、スタッフの間でお互いに手伝いや見守りなどの双方向的な支援関係が作られており、その役割が心地の良い居場所の創出にもつながり、利用の継続、日常化に影響していると言える。(**図 4**)

さらに、このような共用空間の効果として、共用空間

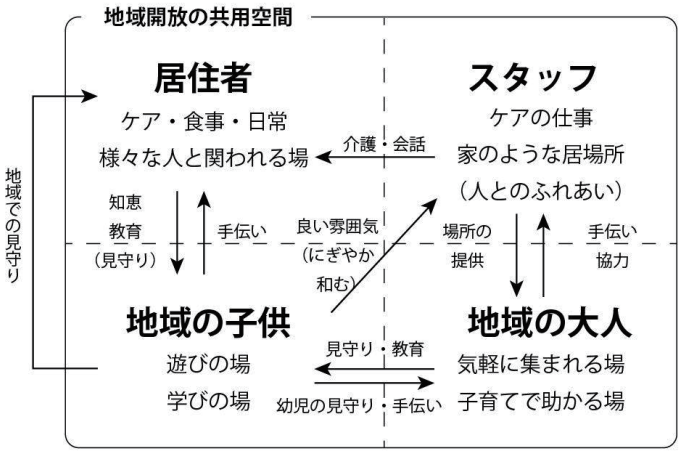


図 4　共用空間利用者の関係図

内で相互に支援し、多世代が支えあって生活しているだけでなく、地域での関係づくりにもつながっている。共用空間で地域の利用者が顔見知りや話し相手など居住者との様々な関係を持つことにより、建物を出た地域でも地域の住民によるろっけんの高齢者の見守りが自然に行われるようになっている事例も見られた。このような地域の見守りがあることで、居住者の外出などの行動が自由になる要因の一つにもなっている。地域の子供が共用空間の中で、子連れで来た地域の人の子守りをしたり、地域の複数の家庭が共用空間内のシェアキッチンで交代して協力して食事の準備をし合ったりと、建物内で多様な地域の住民間の関係も作られており、地域の交流の場にもなっている。

今後の課題としては、居住者や地域の利用者に対するヒアリングが不十分であり、より詳細なデータをとることで多世代での共用空間を通した地域共生についてもさらなる展開が望めると考えている。

【謝辞】
本研究をするにあたり、ヒアリング調査などはっぴーの家ろっけんのスタッフの方にご協力いただきました。ここに記して謝意を表します。

【注釈】

注 1) 園田らは参考文献 1)において以下のように定義している。
「一般的には血縁関係のない高齢者や障害者等が集まって居住し、お互いの自由やプライバシーは尊重しながら家庭的界囲気の中で、食事、家事、団欒・交流、見守り等の相互扶助により共同生活をおくる暮らし方。」

注 2) はっぴーの家ろっけん公式 Facebook より 2020 年 6 月 18 日閲覧
https://www.facebook.com/rokken.happy.home/

注 3)はっぴーの家ろっけん公式 Youtube より 2020 年 6 月 18 日閲覧
https://www.youtube.com/channel/UC74wJScOmH9sqh_Pligtdcw

注 4) 第 14 回住宅系研究報告会　パネルディスカッション「子育て・子育ちから考える多世代居住の生活環境」－「ごちゃまぜ」を測る方法論を探る－、2019 年 12 月 6 日に参加時の内容より

注 5) Help Japan（介護情報発信メディアサイト）記事、多世代が集まる「大家族」の新しいカタチ。介護付き住宅「はっぴーの家ろっけん」2020 年 6 月 20 日閲覧
https://helpmanjapan.com/article/8161

注 6) 第 1 回まちマチゼミ（NPO 法人主催のオンラインゼミ、講師として施設代表の首藤さんが講演)、2020 年 5 月 23 日参加時の内容より

注 7) 本論文内の写真は許可をいただいて施設公式 Facebook より一部抜粋。2018 年 11 月 25 日投稿より 2020 年 6 月 18 日閲覧
https://www.facebook.com/rokken.happy.home/photos/a.439820606351360/756164601383624/?type=3

【参考文献】

1)園田 眞理子、片倉 直人、黒羽における高齢者等の安定的居住に向けたまちづくり活動 ： 既存建物の利活用と高齢者グループリビングの実現に向けたケーススタディ、日本建築学会技術報告集 第 22 号、369-372、2005 年 12 月

2) 土井原奈津江、大江守之、高齢者グループリビングの持続的運営に関する研究－先駆的事例 COCO 湘南台の 15 年の経験にもとづく考察－、日本建築学会計画系論文集、第 80 巻、第 715 号、2071-2079、2015 年 9 月

3) 神戸まちづくり協議会カルテ　平成 23 年度報告書、神戸市都市計画局計画部まち再生推進課、134-135、2012 年 3 月

4)徳尾野 徹、横山 俊祐、高齢者シェアードリビングにおける共同居住と空間要求に関する研究:ワークショップによる理想の暮らしからみる可能性、日本建築学会技術報告集 第 23 巻 第 54 号、613-618、2017 年

5)南 智英、蘇 甲秀、西出 和彦、長澤 泰、高齢者共同居住における共用空間のあり方に関する研究　グループリビングのケーススタディー、学術講演梗概集　E-2　建築計画 II　住居･住宅地　農村計画　教育（2006)、355-356、2006 年 7 月 31 日

6) 近藤 恭代、大江 守之、高齢者グループリビングに関する基礎的研